

# Fun with ENGLISH

～英語教育 環境づくりのヒント～

KEIRINKAN



## 小学校英語開始に向けて～指導のための心構え～

町田 智久 (国際教養大学専門職大学院 准教授)

今年2月に次期学習指導要領の改訂案が文部科学省から公表され、3月に公示されました<sup>(1)</sup>。各テレビや新聞紙上でも大きく取り上げられ、関心の高さがうかがわれます。小学校英語は2018年度からの先行実施を経て、2020年度に完全実施になります。主な特徴は、①「小学校3年生から外国語活動開始」、②「5・6年生では『読み』『書き』も含めた英語教科化(週2コマ)」、③「学習単語は600～700語」などです。

英語教育開始の早期化は世界全体の流れであり、特に他のアジア諸国と比較して日本的小学校での英語指導の開始時期が遅いというのは、長年論議的でした。文部科学省も2011年の『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』を発表し、小学校3年生からの英語教育の開始を提案して、今回の学習指導要領の改訂につなげてきました<sup>(2)</sup>。

小学校英語教育の早期化については、これまでの各種調査でも、教員・保護者共に大多数が賛成しています<sup>(3)(4)</sup>。教員の間からは、英語の音や学習に対する児童の抵抗の少なさが、早期化の利点として指摘されていました。しかし、その一方で、保護者からは「これまで英語を教科として教えた経験のない小学校の教員に授業ができるのか」など、教員の英語指導力に対する不安が強い懸念として示されています<sup>(3)</sup>。これは、小学校英語に対する大きな期待の裏返しだと思います。

私は秋田県で先生方に小学校英語指導研修を実施していますが、研修に参加する大部分の先生方は英語指導に不安を抱えています。英語指導経験の少なさや、英語を話すことへの苦手意識もあると思います。しかし、その先生方も研修を受ける中で、学級担任としての強みや児童の英語学習のロールモデルになることの重要性に気付き、自信を持って学校に戻っていきます。まずは、先生自身が英語をコミュニケーションとして使う楽しさや意義を実感し、英語教育に携わることが大切です。先生方の多くは、これまでも総合的な学習や生活科など、新しい教科を指導してきた実績があります。新しく始まる小学校英語も基本は同じです。学習のめあてを明確にし、そのめあてを達成するための活動を効果的に配置することで、小学校英語にも十分に対応していくはずです。

## 1. 学級担任の強み

長年、英語教育ではALTなどのネイティブ・スピーカーが理想の教師と考えられてきました<sup>(5)</sup>。発音の正確さや豊富な語彙、また英語圏の文化に明るいなどの理由です。そのため「ネイティブの先生の発音をたくさん児童に聞かせたいから」とALTに主な指導を任せ、あまり積極的に授業に関わらない先生も残念ながらいます。しかし、英語を母語としない私たちノンネイティブ・スピーカーは、英語指導においてネイティブ・スピーカーに劣るのでしょうか。いいえ、そんなことはありません。研究者のブラウンは、「現在は多様性のある英語が広く受け入れられているだけでなく、英語の学習過程を実際に歩んできた教師も、ネイティブ・スピーカーに勝るとも劣らぬ利点がある」と述べています<sup>(6)</sup>。では、学級担任が英語を指導する上で持つ強みとは何でしょうか。

まず挙げられるのは、英語学習者としての視点です。先生方は、中学校から英語を始めて少なくとも8年位の学習経験があるはずです。その中で「三人称は難しい内容だったな」や、「ズボンとpantsなど、日本語と英語では同じ物でも単語が違ったな」など、自らの学習経験を基に児童に対してどのように指導するべきか考慮できます。ネイティブ・スピーカーは母語として英語を習得したため、英語学習の難しさには気付きません。ノンネイティブ・スピーカーだからこそ、自らの学習過程を振り返り、難しい単語や表現を扱う際には、少し長めに時間をかけるなどの指導の工夫ができるのです。

2つ目の強みは、学級担任が児童の学習過程や興味・関心などを、よく把握していることです。例えば、理科では星の色の違いについて学習したので、星空の写真を使って英語でも様々な色の言い方を学ばせよう、ということもできます。学級担任は、児童がこれまで何を学習してきて、何に興味を持っているのかを的確に把握しています。子どもたちのニーズを生かした指導ができることも、ノンネイティブ・スピーカーとしての強みです。

そして3つ目の強みは、学級担任が児童と日本語・日

本文化を共有していることです。児童のちょっとしたつぶやきを聞き取り、ちょっとした仕草から児童の理解の状態を把握できるのは、担任と子どもたちが同じ言語や文化を共有しているからです。授業の中で、「ここはわかっていないさそうだな」とか、「ここは大丈夫そうだな」という児童の学習状況を感じ取ることは、わかり易い授業を行う上では欠かせません。子どもたちの学習の機微を感じ取り、指導に生かせるのはノンネイティブ・スピーカーである学級担任が持つ強みなのです。

このように学級担任は、英語指導をする上で大きな強みをいくつも持っています。ですから、学級担任とALTは協働して、お互いの強みを発揮し合うべきです。秋田県の教員研修では、先生方は以上のような強みに気づき、自信を持って英語の指導にあたっています。学級担任が英語を話す姿を見て、子どもたちは「あんな風に話せばいいのか」とか、「担任の先生のようにALTと話してみたい」と感じるようになります。児童にとっての英語学習のロールモデルになれることが、学級担任の最大の強みであり、児童の英語学習の動機付けにもなるのです。

## 2. 基本的な3つの指導手順

新しく始まる小学校英語は、高学年では教科化されます。これまでの外国語活動の授業で散見された、単に「盛り上がる活動」や「面白い活動」を行うだけの授業ではなく、児童の英語のコミュニケーション能力を高める工夫が必要です。そのため、次の3つの手順(①既知から未知へ、②受信から発信へ、③個から小グループを経て全体へ)を考慮して授業を組み立てると有効です。

### ① 既知から未知へ

まずは、子どもたちの知っている知識や内容を活用します。「スキーマ活性化」と呼ばれる作業です。スキーマとは、物事を理解する際に用いる認知的な枠組みです。例えば果物がトピックであれば、児童がどんな果物を知っているか確認します。“What fruits do you

## PROFILE

### 町田 智久 まちだともひさ(国際教養大学専門職大学院 准教授)

1970年東京都生まれ。米国イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校大学院修士課程修了(英語教授法専攻)。同博士課程修了(初等教育専攻)。東京都の公立中学校に英語教諭として12年勤務後、退職し留学。帰国後、国際教養大学EAPプログラム講師を経て現職。『Teacher Education and Professional Development in TESOL』(第11章:Routledge)、『Keirin Kan Science Readers』(啓林館)など。



know?”と質問し、apples, oranges, grapesなど自由に答えさせます。出された意見を皆で共有する中で、様々な種類の果物の英語名を全員で確認できます。これにより、子どもたちの学習してきた内容を正しく確認できると共に、皆が同じスタート地点から始めて次の学習(例えば果物ジュースなどの飲み物のトピック)に移っていけます。当然ですが、知らないものを使ってコミュニケーションはできません。知っている内容を振り返り、活用する中で自信をつけ、初めて新しいことを学習する準備ができます。そのため、まずは既知の内容を使った活動を行い、そこから関連性を生かして新しい学習内容に関する活動に移るのが効果的です。

### ② 受信から発信へ

英語を学び始めた初級学習者の児童にとって、受信活動(「聞く」「見る」)はとても大切です。耳や目から英語のインプットを多く受けることで、単語や表現が蓄積されます。まずは、視聴覚教材や先生自身の発話を活用して、児童に英語表現を十分に聞かせます。例えば、“I like/don't like …”を導入する際に、先生が““I like apples.”と笑顔で言った後で、悲しい顔で““I don't like bananas.””と言います。次に○と×のカードを配布し、““I like …””という文が聞こえたら○のカードを、““I don't like …””だったら×のカードを挙げさせます。色々な方法でインプットを与えることで、児童は英語の音やその意味に気付き、理解します。これまでの外国語活動の授業では、十分なインプットがないままに、発信活動(「話す」「書く」)を行う例が多く見られました。個人的には、各单元の最初の2時間はインプットに当てる位でもいいと思います。児童の英語への気付きを促すためにも、受信活動を十分に行い、それから少しずつ発信活動を行うのが効果的です。

### ③ 個から小グループを経て全体へ

活動の規模もステップを踏むことが大切です。児童の英語学習における不安要因の1つは、友達の前で言い間違えることです<sup>(7)</sup>。誰しも人前で失敗したくはありません。そのため新出の単語や表現を指導する際には、まず児童に1人で口頭練習を行う時間を与え、口慣らしをさせる必要があります。先生やICTなどの音声モデルに続いて、各自で練習する場面を作り下さい。単語や表現に慣れてきたら、ペアや小グループで会話練習をさせます。小グループ内での成功体験を積ませ、発話に自信をつけさせます。その後に、クラス全体でのコミュニケーション活動に移ることで、子どもたちはあまり不安を感じずに活動に取り組めます。

以上のことを行って、まずは小学校英語の指導に一歩踏み出して下さい。一緒に頑張っていきましょう。

#### 【引用・参考文献】

- 文部科学省. (2017).  
『小学校学習指導要領』  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1383995.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383995.htm)
- 文部科学省. (2013).  
『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/25/12/1342458.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/1342458.htm)
- イーオン. (2016).  
『子どもの英語学習に関する意識調査』  
[http://www.aeonet.co.jp/information/newsrelease/pdf/aeon\\_160318.pdf](http://www.aeonet.co.jp/information/newsrelease/pdf/aeon_160318.pdf)
- 英検. (2016).  
『小学校の外国語活動及び英語活動に関する現状調査』  
[https://www.eiken.or.jp/center\\_for\\_research/investigation/](https://www.eiken.or.jp/center_for_research/investigation/)
- Braine, G. (2010).  
Nonnative speaker English teachers. Routledge.
- Brown, D. H. (2007).  
Principles of language learning and teaching. Pearson.
- Horwitz, E. K. (2013).  
Becoming a language teacher. Pearson.

# 『ことばを育てる』学びの英語学習

～週2時間の英語学習の構築を目指して～

齋藤 早苗 (東京都品川区立芳水小学校長)

## 1. 品川区の英語教育

品川区では、新学習指導要領を先取りする形で、英語教育改革に取り組んできました。平成18年度から『英語科』を設け、1年生から週1時間程度、英語学習を行ってきています。さらに、今年度からは、品川区全小学校で統一した新カリキュラムを実施しています。

それが、青山学院大学のアレン玉井光江教授のメソッドです。私たちはそれを『アレン・メソッド』と呼んでいますが、そのメソッドとは以下の通りです。

- 意味のある文脈の中で「ことば」を育てるために、お話を教材を活用した学習方法(ジョイント・ストーリー・テリング)を進めること。
- リテラシー(読み書き)能力を育てること(アルファベット学習・音声認識能力の育成・音と文字の関係の理解)。
- 授業のフレームワーク(骨組み)をつくり、スパイラルで学習すること。
- 語彙学習で「ことば」を蓄えること。

授業は、担任と、ALTまたはJTE(日本人英語指導者)の2人でチームティーチング(TT)の形で行われます。英語のことばを育てるのは、ALTやJTEですが、一人一人の個性をよく知る担任も子供の前に立つことで、『学びに向かう力』つまり心も育てています。授業はほとんど英語で行われ、この英語を通して、『曖昧さに耐える力』や『学びから降りない子ども』を育てようとしているのも大きな特徴の一つです。

そのため担任は、クラスコントロール(学級経営)を大切にすることになります。したがってこの英語教育は、管理職の学校経営にとっても大変価値があることを、私は実感してきました。



## 2. 芳水小学校の英語スタイル

- 『アレン・メソッド』を通して、「学びのある英語学習」を目指すこと

子供たちの英語力を伸ばすとともに、自律した学び、学び続けようとする心、諦めないで頑張る態度がすべての教育活動で繋がってできるように、教員には心の教育の視点も意識させています。

小学校教員が「英語を教える」という立場で子供の前に臨むと、苦しくなります。そうではなく、「子供たちと一緒に学んでいこう」という姿勢をもつことが大切です。一緒に学びながら、教師自身が英語の力を高めていく。そんな姿が、子供を学びに惹きつけていきます。

- 5・6年生では、週1時間+15分間×週3回の英語学習を先行的に実施研究し、週2時間の英語学習のあり方を確立させ、提案していくこと

新学習指導要領の方向性を踏まえて、週2時間の英語学習の展開を模索しています。この1回15分の短時間学習は、担任一人で行うため、1時間の授業と関連づけ、復習を中心とした内容にしています。英語の授業を

## PROFILE

齋藤 早苗 さいとう さなえ(東京都品川区立芳水小学校長)

平成20年から6年間、品川区立小山台小学校で英語の校内研究を行い、3回研究発表会を開催した。平成22年に、青山学院大学 アレン玉井光江教授と出会い、以来アレン教授の理論による英語教育を実践してきている。品川区では、この英語教育を、平成29年度から区内全小学校で展開している。



一人で行うことへの担任の負担感を減らしてもいます。一方、子供たちは週4回英語に触れられるので、確実に定着が図られぐんと伸びるのを実感しています。さらに、「担任の自己有用感も大きくなつた」と私は感じています。

### ○『チームで授業を創り、コミュニティで子供を育てる』 という発想を大切にすること

この英語教育は、品川区という行政の施策、アレン教授という研究者の理論、現場の教員の実践、これらがコラボレートして初めて成しうると考えています。

そして本校の英語教育は、さらに保護者や地域の方の理解と参画を求めていきます。

なぜなら、公立小学校でこの英語の神髄を守るのは、異動のある私たち教員ではなく、この地域にこれからも住まう方達だと思うからです。

そのため、私は平成30年度から始まる品川区のコミュニティスクールを見据えた『芳水学びのキャンパス』という組織を立ち上げています。その中に、英語推進部会を設け、英語の授業にボランティアとして参画していただいたり、大人の英語学習会を開催したりしています。



### 3. そして これから

この英語の学びは、将来子供たちが、「世界市民」として羽ばたくことができるよう、確かな英語によるコミュニケーション能力の土台を育てていると認識しています。そして子供たちが、中学校以降で英語の花が開いていくことを目指しているので、小学校段階では、英語の言葉を体の中に染み込ませている過程です。

小学校で学んだこの英語を、どのように中学校以降に繋いでいくかが、今後の課題になっていきます。

「言葉」や「学び」は、表層的、量的に測れるものではありません。『学びの質』が大切であると気づかされています。本当の学びを通して、お互いの心を通わせられる「豊かな言葉の力」を育てたいと考え、今も模索し、実践を重ねています。

ぜひ、本校の英語教育についてお問い合わせください。

授業参観においでいただき、お互いにディスカッションなどができましたら、これから日本の英語教育のあるべき姿が見えてくるのではないかと考えています。

# コミュニケーション能力の育成とALT

～言葉が通じなくてもコミュニケーションが取れるという安心感～

氏家 翔太(株式会社RCSコーポレーション社長兼CEO)

## 1. ALTの活用とコミュニケーション

現在、国内のほぼすべての市区町村においてALT(外国語指導助手)が活用されています。外国語「指導助手」という呼称が示すとおり、ALTは正規教員ではなく、外部人材として外国語活動や外国語の授業をサポートする立場にあります。ですから、ALTを活用する本来の意義は、語学指導を直接的に行うことよりも、授業内外における子どもたちとのコミュニケーションを通じて、外国語や外国文化、外国人に対する興味関心を子どもたちから引き出すこと、そして何よりも外国語を用いてコミュニケーションを取りたいという気持ちを育むことであるといえます。

現在の外国語教育において、「コミュニケーション能力」を養うことが重要な位置付けを担っていますが、ALTの存在というのは、コミュニケーション能力を直接的に養うためのものではなく、子どもたち自身が自発的にコミュニケーション能力を向上させたいと思うきっかけを与えることにつながるともいえます。では、そもそもコミュニケーションとはどのように成り立っているのでしょうか。

## 2. コミュニケーションと言語の役割

コミュニケーションと聞いて多くの人が思い浮かべるのは、人と人が会話をしている場面でしょう。会話では、いわゆる言語運用能力の4技能のうち、「話すこと」と「聞くこと」を用いています。また、「書くこと」と「読むこと」だけを用いてもコミュニケーションは行えます。例えば、手紙やメールをしたり、あるいはSNSで自分のことを発信したり、友達のSNSを閲覧したりということなどが挙げられます。コミュニケーションの取

り方はさまざまありますが、「話すこと」、「聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の4技能を状況に合わせて活用しているといえます。



言語を用いなければコミュニケーションが取れないのかというと、必ずしもそうではありません。例えば、メールなどで文字ではなく絵文字やスタンプを送り合うということがあります。標識などのピクトグラムも、一方であります。言語を用いない情報伝達というコミュニケーションといえます。また、ジェスチャーやしぐさを用いることも言語を使わないコミュニケーションです。体の動きを用いることで、自分の考え方や気持ちを伝えたり、表情やしぐさなどからお互いの感情や気持ちを汲み取ることが可能です。これらのことを行なうと、言語の活用はコミュニケーションをより円滑にしたり、伝えたいことをより詳細にするためにとても役立ちますが、必ずしも言語を用いなくても、絵やジェスチャー、表情などの視覚情報があればコミュニケーションは行えるということがわかります。つまり、コミュニケーションの根源にあるのは、言語を活用することではなく、情報や気持ちを相手に伝えること、そして相手から感じ取ることであるといえます。

## PROFILE 氏家 翔太 うじいえ しょうた(株式会社RCSコーポレーション社長兼CEO)

1983年埼玉県生まれ。小学校6年生から高校2年生までをイギリスで過ごし現地のセカンダリースクールに通う。帰国後は国立東京学芸大学教育学部附属高等学校大泉校舎(現:東京学芸大学附属中等教育学校)へ編入し、上智大学経済学部経済学科に進学。学習塾や教育教材会社を経て公立学校へのALT配置など外国語教育に携わる株式会社RCSコーポレーションへ。東京支社長、統括部長、副社長を歴任した後に現職。ALTの効果的な活用についての教員研修や一般向けの英語教育に関する講習なども行う。著書『これでわかる! ALTとはたらく70のポイント』啓林館



### 3. 子どもたちを安心させること

ほとんどのALTは外国人であり、日本語を母国語としません。多くのALTが日本語を理解できないふりをして子どもたちが外国語を用いることを促しているでしょう。この「日本語が通じない」という状況を子どもたちに作り出すことは日本人教員ではなくALTにしかできないことです。

コミュニケーションの根源を踏まえると、言語の使用はコミュニケーションをより発展させるためであり、言語がなくてはコミュニケーションが行えないわけではありません。ですから、日本語が通じない相手とコミュニケーションを取るために、外国語を知っていることは必須ではありません。言語を用いずにコミュニケーションを取ろうとする姿勢自体が、言葉が通じない相手とコミュニケーションを取るために最も大切なことです。ですから、ALTを活用して子どもたちに感じさせることは、外国語を覚えないとコミュニケーションが取れないという危機感ではなく、言葉が通じなくてもコミュニケーションは取れるのだという安心感です。

学習指導要領の改訂に伴い、今後は小学校でも外国語の運用能力を評価されることとなります。ですから、子どもたちが「外国語を覚えないといけない」とプレッシャーを感じてしまうことが危惧されます。だからこそ、ALTは授業内外において、外国語が使えなくてもコミュニケーションを取れるということを子どもたちが実感するような時間を多く作ることが求められます。ALTとのコミュニケーションを子どもたちが楽しみ、更にわかり合いたいという気持ちを育むことが外国語の学習意欲につながっていくものと考えます。

今まで以上に子どもたちのコミュニケーション能力

の育成がカギとなります。そのなかで、外国語がわからなくてもコミュニケーションは取れるとALTが子どもたちを安心させることで、結果的に子どもたちは外国語を覚えなければいけないというプレッシャーから解放され、楽しみながらコミュニケーション能力向上のために外国語を身に付けたいと自発的に思うことにつながっていくのではないかと考えています。

具体的なALTの活用方法については拙著『これでわかる! ALTとはたらく70のポイント』をぜひご覧いただければと存じます。

(編注:本冊子の裏表紙に上記の本の紹介を掲載しています。)



教員向け ALTと仕事をする人必見の情報が満載！

これでわかる！

# ALTとはたらく70のポイント



B5判 152ページ 定価2,160円(税込)

ご購入は教科書取扱い書店またはWEBショップまで  
(<http://keirin.shop29.makeshop.jp>)

ALTについての「わからないこと」を丁寧に解説しています。

興味のある項目から順に読んでいただくことも可能です。

英語教師やALTの声を丁寧に集めて作り出した、現場における意思疎通のための必読書です。

point

文化的側面、雇用形態、関係業者、  
法令やルールなど、  
ALTに関わるポイントを  
わかりやすく整理しています。



現役のALTへのインタビューで  
ALTの本音も知ることができます。

Fun with ENGLISH 2017 春夏号

編集・発行 啓林館東京本部 TEL(03)3814-5183(直通)

教授用資料

知が啓く。  
**啓林館**

<http://www.shinko-keirin.co.jp>

本 社 〒543-0052 大阪市天王寺区大道4丁目3番25号

TEL(06)6779-1531

東京支社 〒113-0023 東京都文京区向丘2丁目3番10号

TEL(03)3814-2151

札幌支社 〒003-0005 札幌市白石区東札幌5条2丁目6番1号

TEL(011)842-8595

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1丁目4番34号双栄ビル2階

TEL(052)935-2585

広島支社 〒732-0052 広島市東区光町1丁目7番11号広島CDビル5階

TEL(082)261-7246

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院1丁目5番6号ハイビルズビル5階

TEL(092)725-6677